

## 事前アンケートについて

**1 発達の相談に関すること****(1) 外国にルーツのある保護者からの発達相談の場面****①現状**

- ・発達相談は年々増加傾向。保護者の気づきよりも周囲の勧めで相談している印象。
- ・コロナ禍以降、出身国が多様となった。
- ・両親とも日本語が話せない事例も増えている。
- ・発達相談とともに、サービス利用料などの経済的な相談も受けることが多い。
- ・そもそも発達に気がかりがある子どもの相談を保護者自らがする場合はある程度のコミュニケーション能力があり、子どもの様子等は伝えられるので、相談員としては特に困らない。特定妊婦で出産することになる場合は、言葉の問題が発生することがある。

**②対応に困ること、工夫していること**

- ・子どもの発達の気がかりが、環境によるものか見極めが難しい。外国語のみ話す家庭において、どのような視点で発達経過を見ていくのか、学ぶ場が必要と感じている。
- ・保護者が日本語を全く話せない場合は、サービスに繋がるまで支援したり、利用先に送付をしたりして、支援が途切れないよう対応している。
- ・医療通訳の SHARE（シェア）を利用している。

**(2) 外国にルーツのある子どもの受診や児童発達支援事業所、放課後等デイサービスの医療・福祉サービスにつなげる場面****①現状**

- ・英語対応が可能などところがあるかないかで、基本的には外国語の対応ができる事業所がなく、つなぎ先がない。個別支援計画もセルフプランとなり、健康福祉センター地区担当保健師が対応するケースもある。

**②対応に困ること、工夫していること**

- ・受け入れ施設が見つからない。

**(3) 関係機関との連携の課題**

- ・外国にルーツのある保護者ゆえの課題というより、発達の相談に関する連携の課題になると思う。

**(4) 利用していたサービス(医療、福祉など)を中断していた場面****①現状**

- ・保護者が日本語を全く話せない場合、欠席・延期などの連絡を施設にできず、そのまま中断することがある。
- ・そもそも、動機付けの段階で、十分に理解ができず中断することもある。

**②対応に困ること、工夫していること**

- ・サービスに繋がるまで支援したり、利用先に送付をしたりして、支援が途切れないよう対応している。
- ・事前に施設と調整し、予約日等に来所がなかったときは施設から健康福祉センターに連絡をいれていただき、地区担当保健師が訪問するなどの対応をとることもある。

**2 児童館の活動場面について****(1) 現状**

- ・乳幼児親子は、基本親子で利用する施設のため、親子または親族が保護者として子ど

<p>もと一緒に来館している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・世界各国の親子に利用していただいている。</li> <li>・家族の誰かが日本人または日本語が分かる人がいる場合が多い。</li> <li>・掲示などの案内で伝わらない場合は利用者側がアプリなどを使用して訳している。</li> </ul>
<p><b>(2) 外国にルーツのある子どもへの対応で困っていること</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者と一緒に利用することが基本のため困りごとがあった場合は、保護者を介して保護者と職員が一緒になって対応をしている</li> <li>・言葉について、家庭の会話が日本語なのか別の言語なのかなどを聞き取り、できるだけ分かりやすく伝わるように短い言葉や単語で伝えることがある</li> </ul>
<p><b>(3) 外国にルーツのある保護者の対応で困っていること</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童館の約束事を伝えるときに、翻訳アプリを使用して対応することがある。</li> </ul>
<p><b>(4) 関係機関へのつなぎの工夫</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者の確認をとってから、健康福祉センター、子ども家庭総合支援センター、子ども発達支援センターへ児童館から事前に親子の様子を伝える場合がある</li> </ul>
<p><b>(5) 関係機関との連携課題</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・何らかの事情がある場合は連携をとり互いに情報共有をして支援をしている</li> </ul>
<p><b>3 保育園※<sup>1</sup>、学校生活※<sup>2</sup>について</b></p> <p>※<sup>1</sup> 区立保育園を主とした記載である。</p> <p>※<sup>2</sup> 日本語教育は学務課所管であり、また、相談関係事業は教育支援センター所管であるため知り得る限りの記載である。</p>
<p><b>(1) 現状</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保育園では、発達が気にかかる子どもが年々増えています。保護者からの相談もありますが、保護者側では子どもの発達に関して個性と捉えている方もいるため、保育士が気にかかることを伝えても受け止めていただけない場合もあります。</li> <li>・発達が気にかかる場合には、保護者のご理解をいただいたうえで、保育サービス課開催の要支援児認定会議（年度内4回）に判定の依頼を行っております。</li> <li>・要支援児として認定されますと、保育士の加配に繋がります。また、定期的な心理士の巡回があるため、要支援児の特性による保育の課題等について、保育士が相談できる機会が設けられており、課題解決に役立てています。</li> <li>・通常の学級、特別支援学級ともに外国にルーツのある児童生徒が増加傾向にある。</li> <li>・区では、 <ul style="list-style-type: none"> <li>①日本語学習初期支援事業(日本語を解さない人向け)</li> <li>②ことば支援員事業(通訳。ただし回数・時間制限あり)</li> <li>③日本語学級(板六小・板八小・新河岸小、板二中・志二中)</li> </ul> を展開。また、公益財団法人板橋区文化・国際交流財団では、日本語習得支援として、日本語教室を展開。</li> <li>・外国籍児童のあいキッズ利用は増えている。</li> <li>・保護者が日本語が話せず、利用申請書の記入時にサポートが必要な施設が約半数。</li> <li>・特別支援学校に通うお子さんの中にも、各学年数人ずつ外国にルーツのあるお子さんが在籍している。主にアジア圏内がご出身の方。</li> <li>・両親ともに外国の方の場合もあるが、日本への滞在歴が長く、日本語による簡単なコミ</li> </ul>

コミュニケーションであればとれるご家庭もある。

## (2) 外国にルーツのある子どもへの対応で困っていること

- ・日本語の会話が困難な保護者の子どもは、保護者同様に日本語を話すことが難しい場合もあります。
- ・他の子どもと同様な説明では、なかなか理解してもらえないことがあるため、言葉だけでなく視覚から捉えることが出来るよう理解しやすい対策を講じており、時間を要することとなっています。
- ・日本語を十分に解さない発達課題のある児童生徒に対し、発達検査を実施しても、結果が知的能力に起因するのか、言語発達に起因するのか判然とせず、参考値に止まらざるを得ない。
- ・特別支援アドバイザー(心理士)を全校に定期巡回しているので、状況を丁寧に看取るようにしている。
- ・子どもが興奮してしまった時に、母国語で言葉を発したり、言葉が出なかったりするのので、何に怒っているのかが分からないことがある。
- ・他のお子さんと同じように、非言語のコミュニケーション手段(サインや絵カードなど)を扱いながら関係を築いている状況。
- ・言語面や認知面の発達に関しては、環境によるものも大きいのかどうか、それを見極める力が教員にも必要かと思う。

## (3) 外国にルーツのある保護者の対応で困っていること

- ・日本語の会話が困難な保護者が増えており、子どもに関する保育の課題等を説明するのに時間を要しています。また、宗教による給食食材の細かい制限のある家庭も多く説明に時間を要しています。日本の生活のスタイルや考え方の違いもあり、保育園側からの子どもの発達に関しても、理解してもらうのに時間を要しています。
- ・文化の違いからか、子どものあいキッズでの様子を伝えても、理解してもらえない。自分の子どもが支援が必要な子どもだとは認めたがらない。
- ・日頃からのやりとり(連絡帳や電話対応など)において、伝わりきらない場面も多く困難さを感じることもある。日本の学校のルールや暗黙の了解などの細かい部分が伝わらないこともあり、難しさがあった。
- ・面談や参観などで中には翻訳アプリを使用しているところもある。

## (4) 関係機関へのつなぎの工夫

- ・保護者からの相談があった場合には、発達支援センターや地域の保健師等適切な相談窓口を案内するようにしています。
- ・あいキッズ単独で動くのではなく、学校と連携しながら対応する。
- ・関係機関へつなぐ方法として、担任またはコーディネーターが間に入り、情報を収集するなどのお手伝いをする場合もある。例えば、お子さんを医療につなげたい場合、主治医訪問という形で担任が同行し、必要な情報を正確に医療面につなげるようにしている。

## (5) 関係機関との連携課題

- ・子どもの発達に関して保護者の了承を得られれば、障がい児支援係への相談等も検討できます。その際には、言語の課題は残ると考えられます。
- ・言葉や文化の違いから、保護者に理解してもらうことが難しい場合、関係機関へつなぐ

ことすらできない。

- ・関係機関につながり、様々な支援につながっていくためにも、仲介となって間を取り持つ人または事業者がいてほしい。
- ・それぞれが定期的に情報の共有を行い、そのご家庭への支援につながるように密に連携を取り合っていけたら良い。

#### 4 児童発達支援事業所、放課後等デイサービスの利用について

##### (1) 現状

- ・いずれのグループも希望者は落ち着いてきた。むしろ欠員あるまま年度が終わるほど。
- ・基本相談の件数自体が減少、例年、100 以上あったが、昨年度は 80、今年度は上半期で 30 件ほど。
- ・感覚的には年々増加傾向にはある。現在は契約児の 5%程度。見学して待機リストに載る家族も入れるとだいぶ割合は増える。両親とも日本語理解が困難な家庭もある。
- ・多くは無いが、毎年 1～2 名の外国にルーツのあるお子さんが利用されています。
- ・ご利用目的のご見学をしていただいた方は年間通して数名
- ・現在利用契約者も数名であり、当事業所において増加傾向とは言えない程度
- ・ご両親のどちらかは日本語が話せる為、日常生活で日本語を使用している

##### (2) 集団の場面で困ること、工夫していること

- ・保育園との連携を含めてのことだが、様々な発達状況にあるお子さんを保育・支援するにあたって、これからの時代、集団というものの在り方を改めて考え直していかななくてはならないのではないかとこの部分。
- ・工夫（課題設定について）・・・発達状況の若い児童への支援をまず考えてから活動内容を決めていく。また、うまく集団活動が進まなかった時は、（児童に原因を求めるのではなく）課題設定の再検討を伝える。
- ・家庭内で両親の母国語でのやり取りをしている可能性が高い子どもについて、日本語の言語理解の程度がつかみにくく、支援の見立てが難しい。また、それを保護者と確認しあうことも難しいことがある。
- ・療育内容について、文化の違い、母国の障がい児支援に対する考え方や親族の思いが、こちらの見立てや方針となかなか相いれない場合、当事者である子どもが支援の置き去りにならないよう、気を付けている。
- ・今後日本での生活を継続するのか帰国する可能性があるのかによっても、支援の方向性や優先順位が変わるので、子どものニーズの把握とともに保護者の思いを丁寧に聞くよう気を付けている。
- ・言語面において、通園では日本語で対応しているが、自宅では母国語の場合、言語の遅れなのか判断できない場面が多い。簡単な英語などについては、児に対して使用して反応を伺ったりしている。また、自宅での児への会話について、使用している言語を事前に聞きとり、できる限り支援の中で生かすようにしている。
- ・子どもは日本語をある程度理解していることや、日本語のなかで生活している為、支援中も日本語での言葉かけで困るほどのことは現状ない

##### (3) 外国にルーツのある保護者への説明で困ること

- ・両親ともに日本語での会話が難しかったケースはまだない。ただ、読めない方はいたので、連絡帳や支援計画などは全てローマ字にしたことはある。支援計画の細部について

は担当保健師に依頼したことがあるかもしれない。

- ・言葉が通じているかどうかよりも障がい、または障がい児者に対する日本人の対応や施策を母国のそれらと比べてどう感じているかのほうが気になるが、そこまで話を進められていない。他国を知ること、むしろ日本における発達支援の参考になることがたくさんあるのではと思うので。
- ・丁寧な関係づくりを行うよう心掛けているが、信頼関係の構築に届かない段階で終了してしまうこともある。職員が通訳できる言語の場合は理解が進みやすい。
- ・日常会話は可能である場合であっても、福祉や教育に関する専門的な内容であったり、細かなニュアンスが伝わりにくいことが多い。また、ご両親のどちらかが日本人である場合でも、外国にルーツのある保護者の方へ上手く伝わっているか微妙な場合がある。
- ・日本語を巧みに使用する保護者でも、説明の理解が難しいと話題を替えられてしまいう→話を戻し、言葉を言い換えて説明するようにしている。

#### **(4) サービスが必要と思われるが、保護者の意向で終了となる事例の繋ぎ先について**

- ・こういうケースは少ない。発達検査の継続で弊園とのつながりを継続することはある。むしろ、発達支援以外のお子さんの居場所を伝えるケースはある。
- ・保育園、幼稚園への申し送りは行いたい、あっさり相談もほとんどなく終了に至る場合もあり、引継ぎが難しい場合もある。

#### **(5) 保育、幼稚園、小学校との連携について、手続きの支援について**

- ・小学校については主として相談支援専門員が行っている。保育園・幼稚園は電話連絡の他、訪問なども行う。
- ・区立保育園の実務研修は休止中だが、私立の保育園の実務研修を行ったり、弊園からも訪問したりしている。まだ一園だが、こうした連携を増やしていければと考えているところ。
- ・現契約者ではありませんが、手続き書類の内容理解難しくお困りで相談を受け、支援したことはある。
- ・相談依頼があれば手続き書類の記入などの支援はできるが、何にお困りなのか、放課後等デイサービスの立場では見えずらいことを感じている。

#### **(6) 関係機関との連携課題について**

- ・発達支援事業所も増加し、それが必要とされるのであれば現状は有りと思う反面、「子どもは放っといても育つので親支援を中心にしています」「保護者の要望で就学に必要なことをしています」という発言を他事業所から聞くと、発達支援の必要性について、世の中が期待する子ども像や保護者を不安にさせる情報の在り方という方向でも考えていく必要があるのではと感じる。
- ・早めに相談支援事業所とつながることを勧めることで、重層的に支援の幅が広がり、複数の連携機関との関係づくりがしやすくなる。上記(5)にも通じることだが、手続きのことも含め、家族丸ごとの支援を行いやすくなるメリットがある。一方で、外国籍プラスアルファのニーズのある家庭については、民間の事業所レベルで対応しきれないと感じるケースもある。
- ・主な対応者が外国ルーツの保護者の場合、保護者を通じた情報共有が難しいことがある。
- ・相談支援専門員とは連携を取りやすいが、大きな課題を抱えていないと行政(子ども庭

総合支援センターなど）との連携が難しいと感じている。